

しあわせ

10 月 号



じゅんこう
純孝の子の
親を思うがごとく
いっさいしゆじょう
一切衆生を
みそなわすこと
自己のいとし

『仏説無量寿経』

「手を合わせる母」

ことさらに厳しかった今夏も早や、秋の風情が深まって運動会など恒例行事が秋を演出する。

新型コロナウイルスも感染法上の位置づけが緩和され、自主的な取り組みに変わった。

それとともに、警戒感も薄れたためであろうか、一気に感染者が増加したようである。

一度ならず、二度感染した人もあるとのこと。今後も将来にわたって、感染者を出し続けるのであろうか、なかなか厄介な感染症である。

いついかなる時も、諸行無常・諸法無我の現実は変わらない。すなわち生あるものは必ず死に至り、出会いは別れの始まりである。

仏法は、不老不死の妙法を与えてくれるものではない。夢物語を追い求めながら「欲も多く、怒り腹立ち、そねむ心ひまのない」煩惱具足の人生のままに光を届け、一寸先は闇の人生に無量光明土と表現される光に照らされ包まれる輝かしい現実を与えてくれる。それを親鸞さまは「信心いただく」と表現された。

法座案内



△秋季永代経・納骨堂追悼法要▽

十月 二十二日(日) 昼席

二十三日(月) 朝席・昼席

法話 自坊住職

△法味の会▽

十月 二十日(金) 午前十時

法話 住職

府中町山田二丁目一五十三
栢原山 龍仙寺

電話(〇八二二)二八二四八二

「人間が作るものはすべて境目がある。それをガウディは悲しく思ったんじゃないかな」スペインのサグラダ・ファミリアの主任彫刻家、外尾悦郎さんの言葉だそうです。

ガウディが設計したサグラダ・ファミリアは、着工して一五〇年近くたった現在も建築中ですが、外尾さんによると、ガウディがこの建築で表現しようとしたのは、自然の「グラデーション」だそうです。どこにも境目のない自然のグラデーションなのだと。

七色の虹などと私たちは言いますが、本当は、虹は何色と分けられません。なおいえ実際アメリカでは六色、ドイツでは五色、アフリカでは二色と、虹を何色と見るかは地域で異っています。それは私たちが分けているだけで、自然には色の境目など存在しないからです。まさに自然は境目のないグラデーションであり、ガウディはそれを表現しようとした。すべてに境目をひく人間の姿を「悲しく思った」からだ。

たしかに、わたしたちはあらゆるものに境界線をひきます。土地の境界争いなどは、親鸞聖人の時代も現代も変わりませんし、それが国境になると、戦争すら引き起こします。

しかし、地球儀には国境がひかれていても、地球そのものに境目はありません。おなじように、私たちは自他、善悪、男女、貧富などなど、言葉をもってあらゆるものに分け隔て、「わかった(分かった)」と思っているわけです。本当は明確な境目など存在しないにもかかわらず。仏教では、このような私たちの認識のありさまを虚妄分別(こもうふんべつ)と呼んでいます。ガウディはそれを「悲しいこと」だと思ったのです。

対して、仏さまのまなざしを無分別智(むふんべつち)といいます。分けずにみる智慧、と言えばよいのでしょうか。境目をつくることなく、あらゆるものの悲しみを自らの悲しみとし、その喜びを自らの喜びとする。そう

いう智慧をひらかれた方を、仏さまというのです。『仏説無量寿経』には、そのまなざしが、次のように説かれています。

純孝の子の 親を思うがごとく

一切衆生をみそなわすこと 自己のごとし

多くの経典では、仏さまの心は親心に譬えられますが、ここでは逆になっているのが目をひきます。幼い子どもは、ときに恐ろしいほど無垢なまなこで親を慕いみつめてきます。仏さまが私たちを見てくださるまなざしも、そのようなものだと言われているわけです。

お母さんにべったりになったり、お父さんに行ったり、子どもはそういう時期が移り変わりますが、お寺では、いま五才の次女がお父さんべったりの時期を迎えています。坊守があきれたように、「まあ、お父さんが好きなじゃねえ。ソーシャルディスタンスとって！近すぎ！」としばしば呆れています。

先日も、いつものように寝かしつけていると、次女が枕をくつつけて顔を近づけ、まっすぐ目をみて聞いてきました。

「ひとちゃんが、このおうちでいちばんすきなひと、だれかしつとる？」

思わずたじろぎ、「だ、だれかなあ」ととぼけました。次女は目をあわせたまま、うれしそうに「おとうさん」と、微笑みました。

皆さまも、あるのではないのでしょうか。吸い込まれそうな、親がたじろぐほどのまなざしを向けられた記憶が。あるいは、そのようなまなざしで親を見つめた幼いころの記憶が。仏さまはあのようなまなざしで、今まさに私を見つめてくださっているのです。

ともにお聴聞いたしましょう。いつでもどこでも、どんな私でも、見つめ続けてくださっている方がおられます。汝の悲しみは我が悲しみなのだ。「自己のごとく」この身を見つめてくださっている方がおられるのです。